

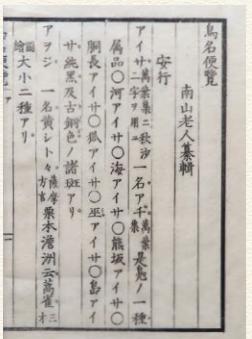




島津重豪の時代、薩摩藩の学術は飛躍的に発展する。島津重豪自身、蘭癖大名と言われるほど、蘭学に傾倒し、オランダ語を学び、ローマ字日記を付けていた。ドイツ人医師シーボルトとはオランダ語で会話をし、シーボルトから動物剥製の技術を学んでいる。島津重豪は、本草学(東アジアの薬物学・博物学)の研究にも力を注ぎ、『質問本草』という本草書や農業百科事典『成形図説』を編纂させ、鳥名辞典『鳥名便覧』、中国語会話集『南山俗語考』を著した。

『質問本草』は、薩摩を中心として南西諸島に及ぶ植物160種の図譜で、鎖国時代でありながら、琉球を通じて、中国の福州、北京にまで調査に赴かせ、中国人による植物名の同定を行った薬草辞典である。幕末に木版出版されるが、玉里文庫所蔵本は、天明年間の彩色写本である。編纂は薩摩薬園署で行われたが、薩摩藩の琉球支配を隠蔽するため、琉球・吳繼志という仮託の人物を著者とする。

さらに、島津重豪は優れた本草学者曾榮らを取り立て、農業百科事典『成形図説』の編纂にあらせた。全100巻を予定していたが、出版されたのは30巻のみである。農事部、五穀部、菜蔬部からなり、農事部は農業に関する語彙、習俗、用具などに関する記事を、五穀部、菜蔬部はそれぞれ穀物と野菜についての解説である。多色刷図版が美しい。



『鳥名便覧』



『質問本草』



『南山俗語考』



『成形図説』



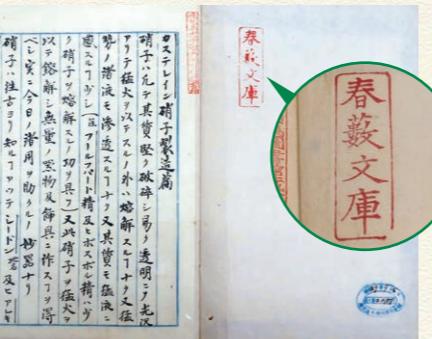
幕末の名君・開明君主として知られる島津斉彬は、殖産興業、富国強兵策をすすめ、鹿児島に、近代的な藩営工場群・集成館を創設し、大砲、銃器、弾丸、火薬、農具、刀剣、陶磁器、ガラスなどの製造を行った。

『硝子製造』は、ガラスの起源・製法・性質などについて記した書物で、斉彬の蔵書印「春敷文庫」が押されている。現在、鹿児島の伝統工芸品として有名な薩摩切子は、もともと集成館で製造されたガラス器で、斉彬の殖産興業政策の成果である。

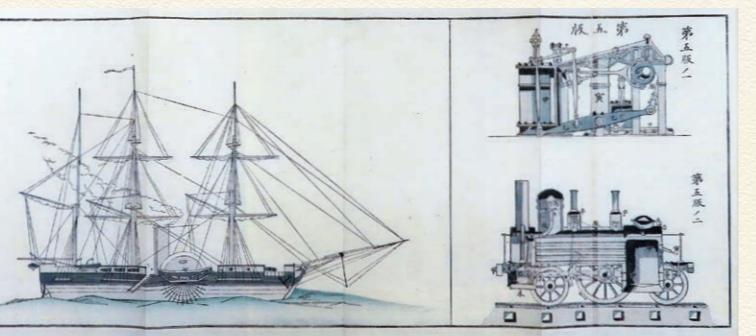
『遠西奇器述』(川本幸民口述、田中綱紀筆記)は、嘉永7年(1854)に薩摩藩によって出版された科学技術書である。著者の川本幸民(1810-1871)は、摂津国三田の人。三田藩の藩命で蘭方医学、蘭学を学び、三田藩藩医となっていたが、江戸で開業したり、島津斉彬の知遇を得て、薩摩藩に仕えることになった。本書は、西洋の科学技術機器について具体的に解説した書物で、川本幸民がオランダ人ファン=デル=ベルグ(P. van der Burg)の1844-1847年刊『理学原始』(Eerste grondtbeginseelen der natuurkunde)に基づいて行った講義を集録したものである。直写影鏡、伝信機、蒸気機、蒸気船、蒸気車などについて記している。これも斉彬の殖産興業政策の一環をなすものである。



島津薩摩切子(薩摩ガラス工芸)



『硝子製造』



『遠西奇器述』



1840年のアヘン戦争以降、東アジアは動乱の時代に入る。こうした国際的な政治状況の動向に日本で最も早く接したのは、薩摩藩であった。こうした東アジア情勢の大きな変化に対応するため、薩摩藩は組織的な情報収集を行ったようだ。玉里文庫にはそうした海外情報の収集の一端を示す資料が保存されているのである。

『漂海紀聞』は、島津斉彬所蔵「春敷文庫」本で、文化9年(1812)12月紀州灘で遭難し、千島に漂着した後、文化13年(1816)7月押捉島に帰還した薩摩川内船間島の永寿丸乗組員の漂流中の見聞をまとめたもので、巻末にロシア語681語、ロシア語対話13例が示されている。

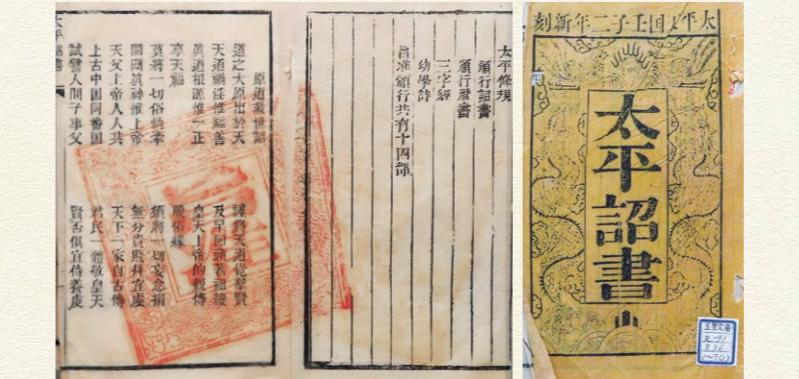
『宇婆良加波那』(「春敷文庫」本)は、文政11年(1828)10月台風に遭遇し、翌年1月ルソン島北部に漂着し、マニラ、マカオ、広東、乍浦を経て長崎に帰国したことを記す漂流見聞記である。

『太平詔書』は、太平天国による印刷物である。太平天国とは、1851年春、中国の広西に勃興し、1864年に南京で滅亡した漢族の反清運動である。清朝の厳しい摘発により、太平天国印刷物のほとんどは欧米に現存しており、日本では玉里文庫にのみ所蔵されている。



『漂海紀聞』

『宇婆良加波那』



『太平詔書』



島津家は、鎌倉時代から江戸時代まで薩摩を領有した武家の家柄であるが、初代惟宗忠久が近衛家の家司を勤めた家柄であったとの説もあるように、島津家は五摂家筆頭の近衛家との縁が深く、江戸時代には、島津家の姫が四人も近衛家に嫁入れしており、島津家の二人の姫、茂姫(広大院)、篤姫(天璋院)も近衛家の養女として徳川將軍家に嫁入れしている。このような婚姻関係を背景として京都の公家文化が玉里文庫所蔵図書にも反映している。

嫁入り本『源氏物語』54帖は、室町末期の写本で、公家・大名の子女が嫁入れの際に持参する嫁入り道具のひとつである。本書は近衛家より天皇家への嫁入り本であったが、その後、近衛忠熙(1808-1898)に嫁いだ郁姫(島津斉宣の娘)に譲られ、玉里島津家に伝わったものである。

古筆『源氏物語』15帖は、『源氏物語』の鎌倉、室町初期の綴葉装古写本。現存する『源氏物語』の古写本はそのほとんどが鎌倉時代の校訂を経た河内本系か青表紙本系(藤原定家校訂)であるが、本書はどちらでもない別本を8帖含む。江戸時代の古筆家第七代了延(琴山)の鑑定では、「須磨」は後醍醐天皇(1288-1339)の宸翰(天皇自筆)という。

『古今和歌集』は、了延(琴山)の鑑定によれば、江戸初期の著名な歌人・能書家である烏丸光広(1579-1638)の筆写。



古筆『源氏物語』15帖「須磨」



『古今和歌集』